救済の多様性　生長の家 ②

天理大学国際学部教授
山田　政信　*Masanobu Yamada*

シンクレティックな宗教実践者

次に、アウグスタの語りをみておこう。彼女は夫の入信をきっかけに信仰を始めることになった。夫は突然会社を解雇され精神的な安寧を求めて「たくさんの教会の戸を叩いた」という。

> 今では聖書に書かれてある内容が以前よりも理解できるようになりました。例えば、先日行われた友人の死後30日を祈念するミサでは神父の言葉が良く理解できました。普段のカトリックのミサには出席したいとは思いません。心を満たしてくれないからです。カリスマ刷新運動が流行っていますが、そこでも私の心の中にある疑問を解消してくれるような話しは聞けません。神父の話しは、私にはとても空虚に聞こえます。生長の家を信仰すると、より良きカトリックになれるのです。カトリックの教えは生長の家の中にあるんです。生長の家は具体的に説明してくれるのです。たとえば、生長の家では人を許すということがどういうことなのかを上手く説明してくれます。人がだれかのことを憎んだり不愉快に思ったりするのは、自分自身の心を閉ざしているからなのです。心をブロックしているからです。自分の心を閉ざすことが神様の愛に波長を合わせることを不可能にしているのです。自分自身の心の蓋を開けることが人を許すということなのです。神様と波長を合わせることで健康や家庭の繁栄が与えられるようになるのです。

彼女はカトリックと生長の家の二重の信者アイデンティティを持ち、より良きカトリック信者になることを彼女自身の目標にしている。しかしながら信仰実践の場は生長の家である。こうした様態を筆者はシンクレティックな宗教実践者と呼ぶが、そのような人々を生み出す生長の家はブラジルでの布教を容易にしている。多くのブラジル人にとって、宗教とはイエスの教えに他ならないからだ。アフロブラジリアン宗教やカルデシズムは、そうした宗教実践者を生む代表格である。逆に、イエスを説かない宗教は宗教ではないという認識がある。天理教やＰＬ教団を知ったのち、やがて離れていく者がいる。そうした人々の中には「イエスが説かれていない」とか、「聖書が使われていない」ことを理由にすることが多い。

心なおしと和解

ところで、アウグスタの語りには生長の家が説く災因と救済について述べている重要な箇所がある。すなわち、「自分自身の心を閉ざす」、「心の蓋を開ける」ということである。生長の家では「罪は包み」だと言われる。元来自由に開花するはずの心を包むこと、つまり心を頑なに閉ざしてしまうことが罪であり、それが災いの原因になるという。

自己の内面の倫理性を変革することによって利得が生み出されるのを期待する思考法を新宗教研究では「心なおし」と呼ぶ。たとえば、天理教の「ほこりを払う」とか、PL教団の「心癖をとる」という信仰実践である。このことを踏まえて生長の家信者の語りをみると、「心なおし」的とは言い難い。天理教とPL教団の語りには、自己を見つめる内向きのベクトルが感じられるのに対して、生長の家では自己を開放する外向きのベクトルが働いているようにみられるからだ。

確かに、生長の家でも反省やお詫びをすることは一つの信仰課題に位置付けられている。しかし、瞑想や生活実践において神との合一を図るとか、あるいは一切のものとの和解を目指すといった外向きの思考法が重んじられるため、道徳的というより超越的な規範が前景化することになる。教義が理念的・観念的に力強く語られる傾向が生まれるのは、こうした理由によるだろう。生長の家では神仏との神秘的な交流を重視するが、天理教やＰＬ教団のように倫理的側面に焦点を当てながら他者との日常的な関わりにおいて問題を解決しようとする傾向が少ないといえる。

「實相」を観ること

道徳的な規範を重視する「心なおし」よりも超越的な規範に目覚める思考は、霊威的次元に顕になる「實相」を観る（悟る）ことに他ならない。それは、信者にとって霊威的次元への超越といえる。アウグスタが言う、閉ざされた「自分の心」の蓋を開けるとは、「偽りの自己」を捨てることであり、「本来の自己（「實相」）」と合一するということになるだろう。

超越への契機のありかたをもう少し見ておこう。アウグスタは、生長の家の教えを聞く前にカルデシズムにも通っていた。彼女は、次のように二つの教えを比較する。

> 私はカルデシズムに１年通いました。カルマという考え方はカルデシズムで学びました。しかし、その考え方は納得できませんでした。自分の知らない過去のことで苦しまなければならないということを受け入れられなかったからです。カルデシズムでは私が苦しむのはそうならなければならないカルマを持っているからで、それを支払わなければならないのだと説きます。カルマに苦しまなければならないのです。生長の家に来て、カルマを超えるという教えに触れました。そして、すべては幻想で結局のところカルマは存在しないと学びました。でも、カルデシズムで私は霊的な成長が得られました。ですから感謝の気持ちでいっぱいです。生長の家ではあらゆる知識は新しい知識に繋がっていると説いています。人間は常に成長しています。私は決してこれまでの考え方を捨ててしまったわけではないのです。

生長の家ではカルマを超えることができると説く。災いは現象世界におけるカルマによって引き起こされるが、それは本来久遠行き通し、恒常の存在である神が仮の存在として現れたものだともいう（谷口 1997: 91）。また、カルマは「念波」の集積であり、結局「何もない」はずの無という一種の波であるという。本来「無」であるはずのものを「有るもの」であるかのごとく錯覚しているから苦しみが生まれる。救いは、そのような迷いから解放されるところに現れる。それはカルマを超えた生命の実在としての「實相」である神に目覚めることに他ならない。

この意味で生長の家の救済は、天理教やＰＬ教団のように人間関係の中で紡ぎ出されるというよりも、神と人間の直接的な関係性のなかで自己完結的にもたらされるといえよう。とはいえ、生長の家でも、たとえば職場における上下関係の尊重や夫婦関係における妻の夫への従順というような儒教的倫理を尊重する。状況的関係的な「心なおし」を決して否定しているわけではないのである。